# 8 月 6 日のメッセージ

聖書：ローマの信徒への手紙　12：　9－21

## 「祝福を祈りなさい」

今日から第 105 回全国高等学校野球選手権記念大会(夏の甲子園)が始まりました。「何もあんな暑い所で」と思う方もあれば、「これがなくては夏ではない」という方もあるでしょう。「選手権」なので、必ず勝者と敗者が生まれます。出場できた者、涙を呑んだ者たちの努力が報われてほしいと願います。

先日、とある広告が話題になりました。それは某小学生新聞の広告で、「夏から始めて差をつけよう」というコピーが論議の的になりました。指摘した方の思いを一言で言えば、「他人との比較でしか自己の価値を計れない」ことが問題だ、と。各自の努力によって「差がつく」ことはあり得るけれど、「差をつける」ことが目的化するのが筋違いだ、と。

相対的に過ぎないものが目的化され、絶対化される。そのような社会に私たちは生きています。そこからは、「勝ち組、負け組」といったレッテルや、行き過ぎた「働かざる者食うべからず」といった強者の論理だけがまかり通ることになります。

しかし、神はそのような価値観に明確に「否」と言われます。

「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。」(出エジプト記 22:20-21)

これは、「あなたも再びその立場に置かれる可能性があるから」という相対的な理由ではありません。「わたしは憐れみ深いからである」(出エジプト記 22:26)。神が造られた全てを愛することは当然のことだからです。

また、神を愛すること、隣人を愛することも「巡り巡って自分に返ってくるから」ではありません(「彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。』イエスは言われた。『正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。』」ルカによる福音書 10:27-28)。神が造られたものを愛されるように、私もまた一個の被造物として神の造られたものを愛していくこともまた当然のことだからです。

だからイエスは、「隣人とは誰ですか」と固定化し、絶対化しようとする問いに、「だれが隣人となったか」と問い返されるのです(「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」ルカによる福音書 10:36)。

「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。」(ローマの信徒への手紙 12:14)

呪いの言葉は「あの人たちと私とは違う」と「差をつける」ことによって生まれてきます。「あの人たちは隣人ではない」と相対的な自分の価値を絶対化することによって生まれてきます。

イエスは「あなたにはあなたという価値がある。誰かと『差をつける』必要など一切ない」と言われたのではなかったでしょうか。「行って、あなたも同じようにしなさい。」(「律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』」ルカによる福音書 10:37)と言われたのではなかったでしょうか。悪に悪を返すのではなく、自分だけを愛するのではなく、神の愛される隣人に善を行えと言われたのではなかったのでしょうか(「だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。」ローマの信徒への手紙 12:17)。

ならば私は隣人のために平和を祈る私でありたい(「わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように。』」詩編 122:8)。世界の平和を願い続ける一人であり続けたい。

神はそのような私たちの願いを必ず聞き届けてくださる。そう信じて、今日も一歩を踏み出していくのです。